

伝統的な町なみの残る旧宿場町における社会的衰退の現状と地域再生に対する住民意識

一因幡街道大原宿を事例として一

明石工業高等専門学校 建築・都市システム工学専攻 森田 舞
明石工業高等専門学校 建築学科 教授 八木 雅夫

1. はじめに

近年、都市部への若年人口流出により地方の過疎化が進み、経済的な地域格差の拡大が起こり、高齢化が進行している。伝統的な町なみの残る多くの地区は、こうした地方の中心的な町場を形成していることが多い。このうち、観光地として再生を果たした地域を除けば、ほとんどの地区で住民が減少し、高齢化する状況の中に埋没していることが推測される。この傾向は、かつて山陰と山陽を結ぶ要衝の地として栄えた旧因幡街道の宿場町、岡山県美作市古町地区にも現れている。

古町地区は、鳥取に通じる旧因幡街道にあり、江戸時代の参勤交代で栄えた古い宿場町である。場所は、兵庫県佐用郡佐用町平福から約12kmの距離、県境を隔てた所に位置する。旧大原町の8割は山林で、中国山地の山々に囲まれ、瀬戸内海に注ぐ吉井川の支流・吉野川沿いに集落が開けている。また、街道沿いには本陣や脇本陣が現存し、平入りの整った町家の家なみが連なる。

歴史的な町なみが現存する一方で、都市部への人口流出により過疎化が進み、人口減少や高齢化が進行し、平成17年3月31日に市町村（勝田郡勝田町、英田郡美作町・大原町・作東町・英田町・東粟倉村が美作市へ）の合併が行われた。図-1は、全国、美作市、旧大原町、古町における5年前に対する人口増加率を、図-2は高齢化率の経年変化を示したものである。なお、旧大原町、古町地区の値は大原町人口集計¹⁾によるもの、全国、美作市の値は国勢調査²⁾によるものとする。

図-1より、全国の人口が増加しているのに対し、美作市、旧大原町、古町ともに減少し、なかでも古町の平成17年における人口は平成12年より5.10%減少していることがわかる。また、図-2より、全国、美作市、大原町、古町、いずれも高齢化率が増加しているといえる。古町では、平成17年における値が平成12年に比べ4.2%増加している。これらの傾向は因幡街道沿いの地域だけでなく、吉野川を隔てた地域にも現れている。過疎化の影響で地元の高校が閉校となり、若者が安心して暮らせる環境を望む声も挙がっている。現在は限界集落とまではいかないが、高齢化率は増加傾向にあり、このままいくとそれに近い状況が考えられる。

また、合併により、行政による古町地区における町なみ整備への支援が終わった。平成13年から16年まで継続的に行われていた「大原町並み保存検討委員会」の活動や、平成2年より行われていた町なみの保存・修繕・整備活動が停止している。街道沿いに位置し、大正4年の建築である難波邸の修理も途中段階である。

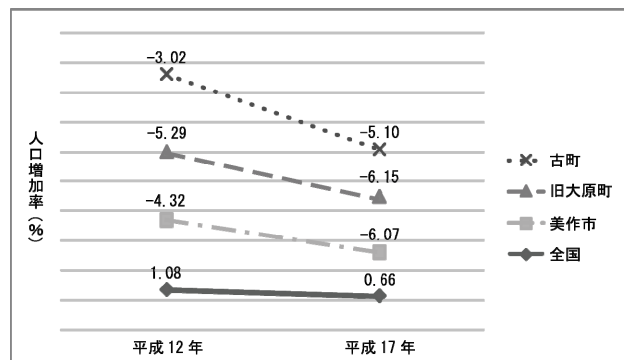


図-1 5年前に対する人口増加率

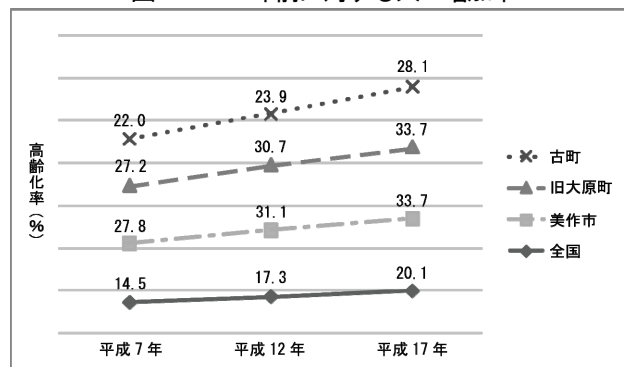


図-2 高齢化率の経年変化

2. 研究目的

古町地区では、平成2年より継続的に町なみ整備が行われてきたが、過疎化や高齢化が進み、町なみ整備による成果が見えてこないという現状がある。市町村合併の影響で、行政による支援も終わり、古町のまちづくりに対する地域住民の意向が明らかにされていない。

本研究では、人口動態や空き家の現状により社会的衰退の現状を明らかにする。また、地域情報や住民のニーズ調査を通じ、古町地区の現状と町なみ保存に基づいた地域再生に対する住民の意識を明らかにすることを目的とする。

3. 研究方法

文献および現地調査により、古町地区の地域情報、現状および年間行事を調査する。次に、空き家の状況を把握し、古町に対する住民意識のアンケート調査を実施する。これらの結果を集計・分析し、古町地区における衰退の現状と住民意識を把握する。

4. 古町の現状と特徴

4.1 古町の町なみと旧暦のひな祭り

古町地区は本陣や脇本陣などの歴史的価値のある建物が数多く現存し、自然に恵まれた環境の中、美しい町なみを

形成している。また、近隣には平福や武蔵の里などの歴史的な町なみや観光資源が存在する。一方で、過疎化により空き家は増加し、飲食店の経営が成り立たない。観光に対する環境も整備されておらず、景観の中で看板や自動販売機といった異質な物が目立つ。

しかしながら、この地区では旧暦のひな祭りや夏祭り、秋祭りなど、様々な行事が催されている。旧暦のひな祭りは毎年4月に開催され、古町一帯がひな人形で埋め尽くされる。住民が自宅にひな人形を飾り、道行く人々に公開する。なかには、自宅の奥にひな人形やそれ以外のもの（着物等）を飾っている家もあり、建物の内部の様子まで見ることができた。町なみに沿って露店が出て、普段は閑散としている町なみがにぎやかになる。このような行事は珍しく、情報発信により、古町を訪れる人々が増加する可能性は十分にあると考える。

4. 2 空き家の調査結果と考察

図-3は、平成18年10月29日時点における空き家の状況を示したものである。これは、地図を元に地元の方々の協力を得て作成した。なお、今回調査したのは3~7常会で、黒く塗りつぶしてある部分は空き家を、点線は人口統計区分を示している。図-3より、街道沿いに位置する多くの家屋が空き家の状態であるという結果が得られたが、家主が定期的に帰ってくる空き家もあり、廃墟と化していない。

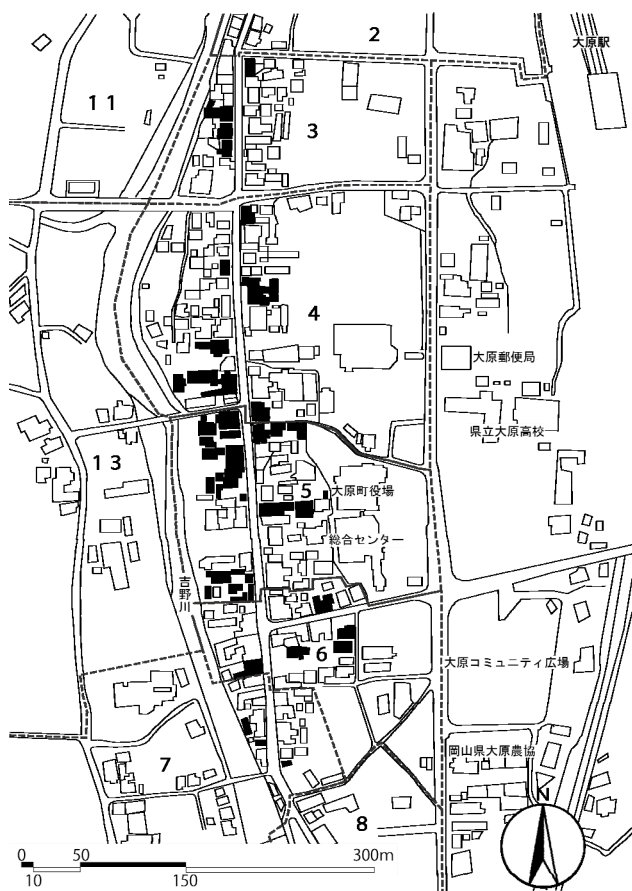


図-3 空き家の状況

5. 古町に対する住民意識のアンケート調査

5. 1 アンケート調査について

アンケートは、地域住民の協力を得て、街道沿いの第3~7常会（古町全体で13常会が存在）で113部配布した。この地区は、人口統計区分の3~6区分に該当し、平成12年の人口増加率はその5年前に比べ-1.27%、平成17年には-12.18%であり、大幅に人口が減少している。高齢化率は、平成7, 12, 17年の順に27.2, 29.5, 34.3%となっている。全国、美作市、大原町、古町（全体）と比較すると、より過疎化、高齢化が進んでいる地域といえる。

平成18年12月5日時点で郵送により55部回収し、回収率は48.7%であった。世帯数そのものが少ないため、配布数も少なくなっている。

5. 2 アンケート実施結果と考察

以下の(1), (7), (8)については、該当する項目を1つ選択、(2), (3), (4), (5), (6)については、複数個選択することとした。また、後者については、回答合計が回答者数を上回る場合もある。では、調査結果を以下に述べる。

(1) 回答者の年齢層

図-4より、60歳以上が回答者の64%を占めていることがわかる。高齢者中心の提案をする一方で、若い人々が住み続けられる配慮が必要である。

(2) 古町での居住歴

図-5より、木造の耐用年数が一般的に30年といわれているのに対し、古町地区では73%の人が耐用年数を超えて住み続けていることがわかる。60年以上住んでいる人は26%であり、家に愛着をもっている住民が多いといえる。

(3) 旧暦のひな祭りへの参加状況

図-6より、企画運営者、ひな人形提供者、一般客として、全回答者の約7割が参加していることがわかる。参加者の約半数が企画、協力された方であることは積極性の表れであり、新しい企画を実施する際の推進力になると考えられる。

また、表-1は難波邸活用への意向とひな祭り参加度の関係を示したものである。これより、難波邸の活用に批判的である人は、企画・運営やひな人形の提供など、積極的に直接関わっていないことがわかる。

(4) 古町の魅力について

図-7より、古町にとって本陣や脇本陣などを含めた歴史的な町なみが一番の魅力であり、次世代へ継承していくべきだと地域住民は考えているといえる。また、周辺の自然環境に恵まれ、静かで落ち着いて、美しい町なみを観賞できるといえる。こうした都市にはない良さを活かした提案が必要である。

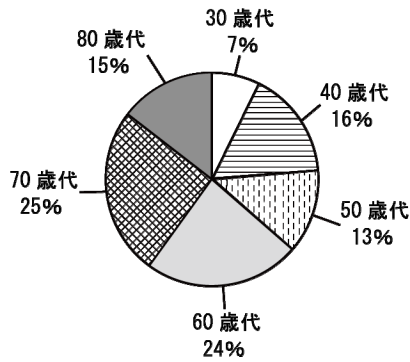


図-4 回答者の年齢層 (母数: 55)

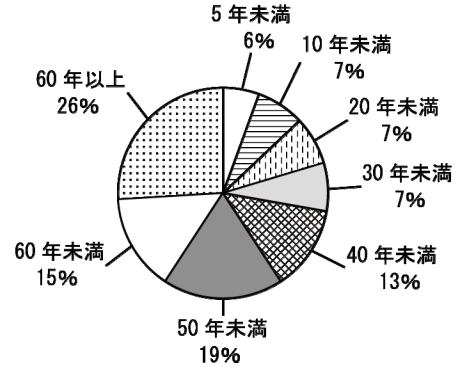


図-5 古町での居住歴 (母数: 54)

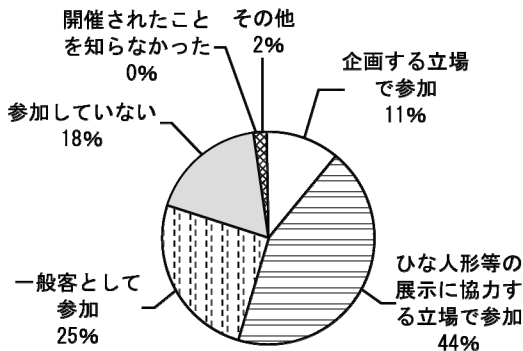


図-6 ひな祭りへの参加状況 (母数: 55)

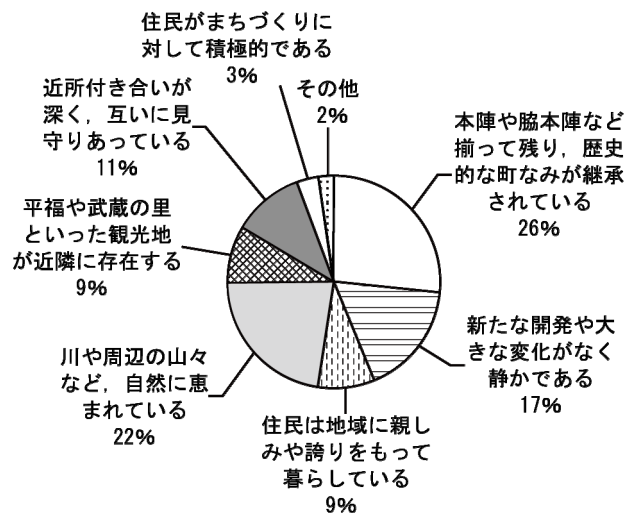


図-7 古町の魅力 (回答合計: 142)

表-1 難波邸活用への意向とひな祭り参加度の関係

難波家活用への意向	ひな祭りへの参加度				
	企画運営する立場	ひな人形展示に協力	一般客として	参加していない	その他
とても反対である	0	0	1	2	1
それ以外	5	20	10	8	0

(5) 古町の課題について

この地区は高齢化率が高く、近隣の町村と合併した背景があり、図-8においても少子高齢化の進行が最も問題視されているという結果となった。若者の流出を防ぐ方法を、今後模索していく必要がある。また、空き家や空き地が増加の一途を辿っているが、これをまちのコミュニティ施設として利用するなどして、まちの再構築を図る努力が必要である。

(6) 参加したい行事

夏や秋の祭りおよび旧暦のひな祭りは実際に行われており、図-9においても上位を占めるという結果になった。一方で、伝統的な建物の清掃は実際に行われているが、進んで参加を希望する人は少人数である。また、フリーマーケット(蚤の市)や文化講座の実施が期待されている。

(7) 地域の中で欲しい場所

図-10より、全世代あるいは老人が集える場を求めていることがわかる。こうした集いの場は、老人の孤独死を防ぐとともに、住民同士が交流し、地域コミュニティを形成する重要な場であるといえる。また、今後は、子供たちが近くを流れる川や周辺の山々といった自然と触れ合うための公園や広場などを整備していく必要があると考えられる。

(8) 古町の今後のあり方

図-11より、住民による助け合いの精神の構築と歴史的な町なみ保存が大きな目標とされているといえる。福祉施設を求めている理由としては、(1)の結果より、回答者の64%が60歳以上であり、古町地区に高齢者が多い状況にあることが考えられる。

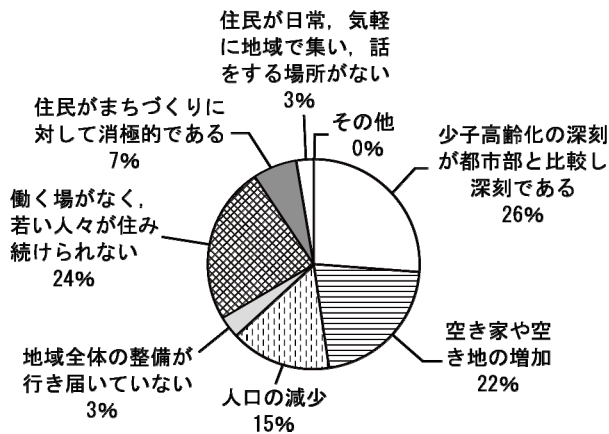


図-8 古町の課題 (回答合計: 152)

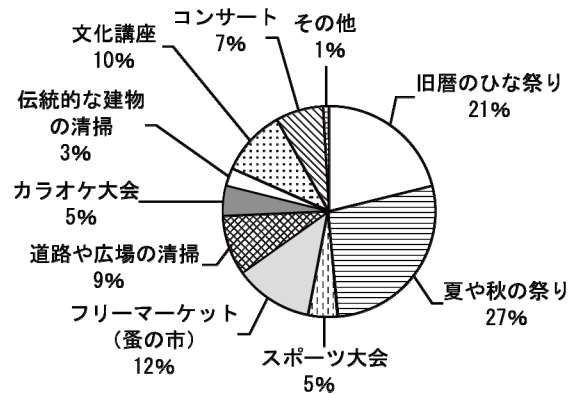


図-9 参加したい行事 (回答合計: 113)

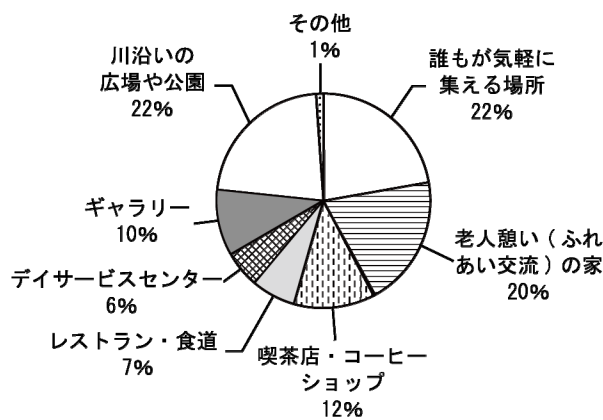


図-10 地域の中で欲しい場所 (回答合計: 96)

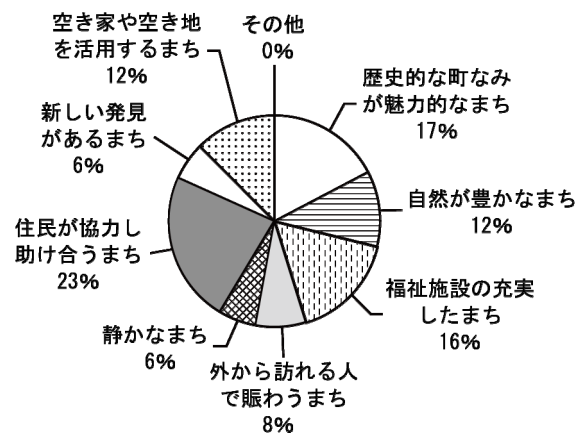


図-11 古町の今後のあり方 (回答合計: 104)

5.3 アンケート結果のまとめ

アンケートの結果を以下に述べる。

- (1) 回答者の半分以上が高齢者である
- (2) 回答者の約40%が古町で50年以上暮らしている
- (3) 本陣や脇本陣、歴史的な町なみが魅力
- (4) 少子高齢化を問題視
- (5) 地域住民が集う場が必要
- (6) 住民が助け合うまちを要望

アンケート結果より、回答者の半分以上が高齢者であったことから分かるように、古町地区の地域住民は特に少子高齢化を問題視しているが、歴史的な町なみが一番の魅力だと感じていることが明らかとなった。

6. まとめ

古町地区における社会的衰退の進行は、人口減少の実態や空き家の現状、高齢化率の増加により明らかである。こうした傾向は、合併に伴い変化した行政の実情、たとえば、住民の意向を捉えきれていない行政施策により、さらに進行するおそれがある。

アンケートより、住民は歴史的な町なみの保存を望んでおり、本陣や脇本陣をはじめとする歴史的な町なみの再評価が必要となっている。前述したような問題を抱えながら

も、難波邸の修理や旧暦のひな祭りの継続など、再生に向けての取り組みを展開し、そうした方向を支える意向もアンケートで明らかとなった。

また、アンケート調査を実施した翌年の1月に、地域住民のボランティアにより発足した「武蔵の里鎌坂峠ツツジ園の会」の活動が活発になっており、これまでに、2000本以上のツツジ、桜、紅葉などを植樹している。古町地区の町なみ整備への行政支援が終了した今、古町の町なみ保存活動から武蔵の里における活動へ、活動の中心が移行していると考えられる。

このように、活動の中心が移行している背景には、合併に伴う支援の終了が原因として存在することは明らかである。今後は、歴史的な町なみが残る古町地区への再評価をするとともに、新たな町なみ整備の枠組みへ介入していく必要があるのではないかと考え、これからの動向を見守りたい。

参考文献

- 1) 大原町 人口集計, 岡山県美作市大原支所
- 2) 総務省 統計局 国勢調査, 平成20年6月17日取得
<http://www.stat.go.jp/data/kokusei/2005/index.htm>